平成２４年度　８０２０公募研究報告書抄録

研究課題：緩和ケア病棟における歯科の役割に関する研究

研究者名：細川　亮一[1)]、伊藤　恵美[2)]、吉田　英子[1)]、田島　つかさ[3)]、高橋　哲[4)]、小関　健由[1)]

所属：１）東北大学大学院歯学研究科　口腔保健発育学講座　予防歯科学分野、２）東北大学大学院歯学研究科 歯学イノベーションリエゾンセンター 地域連携部門、３）東北大学　大学院医学系研究科　緩和医療科、４）東北大学大学院歯学研究科　口腔病態外科学講座　顎顔面・口腔外科学分野

（目的）

平成 21 年度における厚生労働省統計では、40 歳代～80 歳代における各年代の死因順位の一位はがんとなっており、国民の三人に一人は何らかの緩和ケア的治療を受けていることになる。緩和医療において、口腔期機能の低下は QOL の低下に直結することが多く、歯科の関与の必要性が高まっている。しかしながら、歯科医師ならびに歯科衛生士が緩和ケアに関わるにはハードルが高く、社会の必要性に歯科界が十分に応えていないように思われる。そこで本研究では、歯学部の学生と卒業後の歯科医師の緩和医療に対する意識調査ならびに、緩和病棟入院患者の口腔に関する調査を行い、社会の要望に対する歯科の学部教育、卒後教育の在り方在り方について検討を行った。

（方法）

東北大学歯学部 5 年生 48 名に対して緩和ケアに対する意識調査、東北大学　大学院歯学研究科で行った周術期セミナー参加者の一部である 112 名に対して周術期口腔機能管理に対するアンケート調査、ならびに平成 24 年 1 月～12 月に東北大学病院　緩和医療科に入院された患者 142 名に対して、入棟時の口腔に関するスクリーニングを行った。

（結果）

歯学部学生ならびに卒後の歯科医師ともに、がん治療ならびに緩和医療の一環としての歯科治療の重要性を認識しているが、がん治療に対する知識や経験が不足しているため、がん治療中、治療後の患者との関わりに不安を感じていた。さらに、患者の精神的なフォロー等の負担が、患者との関わりから遠ざけていることがわかった。また、緩和病棟に入棟してからは齲蝕、歯周病、並びに義歯といった従来の歯科治療より、口腔乾燥や口腔内の清掃不良に対する口腔ケアの需要が高いことがわかった。

（考察）

緩和病棟の患者、家族、並びにケアを行っている看護師から、歯科の関わりを強く望まれているが、歯科における学部教育や卒後教育の過程において、がん治療に関わるための知識やコミュニケーション スキルに関する講義等がないことが、歯科関係者の不安の要因の一つとなっている。また、教育機関や卒業後も異業種との接点がほとんどなく、どのように患者情報を共有していくのかなど医科歯科連携の課題の方策を考えていかなければならない。